思文閣出版
1,900円＋税

元祖リベラリスト 新島襄を語る（五）

本井康博（大学神学部教授）著

本井康博教授の『元祖リベラリスト　新島襄を語る（五）』は読者に話しかけるような口調で、大変読み易く、引き付けられる内容である。しかも新しい資料探索の成果が取り入れられている。本書口絵に新島が神学校時代フィラデルフィアを訪れ、独立宣言文の複製を求めたことを写真入りで紹介している。彼がニューイングランドで学びとったものは、キリスト教とデモクラシーと人間教育であり、この写真はデモクラシーの原点としての独立宣言文に彼が強い関心を示した恰好の証拠である。2枚目の口絵は月ヶ瀬の騎鶴楼の写真で、1887年4月、新島が梅林を見に行って泊まった旅館である。彼は深井英五に「真理似寒梅　敢侵風雪開」と色紙に書いて贈ったが、彼は真理を春の魁として咲く寒梅にたとえ、真理が敢えて風雪を侵して開くことを表現しようとした。明治維新、日本の風土の中で聖書の真理を日本に広めようとするリベラリスト新島を紹介する上で月ヶ瀬の梅林は象徴的である。新島学園創立60周年記念式の写真も、新島の故郷安中に蒔いた一粒の麦がすくすくと育ち、将来のリベラリストが生まれることを示すもので、これら3枚の写真は『元祖リベラリスト』の内容を示す上で絶妙の効果を発揮している。本書は新島が日本のリベラリストの元祖であることを実証する珠玉のエッセイで満たされている。是非お勧めしたい本である。

井上勝也（大学名誉教授）

知泉書館
9,500円＋税

エックハルト ラテン語著作集Ⅲ

エックハルト著、中山善樹（大学文学部教授）訳

ドイツ神秘思想の巨人、マイスター・エックハルトのラテン語による主著『ヨハネ福音書註解』の待望の全訳が、中山善樹教授によってこのたび知泉書館より刊行の運びとなった。

エックハルトは当代きっての神学者としてパリ大学神学部で二度教授職を務め、ドミニコ会総長代理の重職に就き、かつ一般信徒の間ではカリスマ的司牧者として「学の巨匠にして生の達人」と称せられた13世紀中世ドイツに生きたドミニコ会士だが、その晩年、自分自身が異端審問にかけられるという希有な人生を送った人物である。人間を神の子らと呼ぶ『ヨハネによる福音書』は福音書の中でも最も深い福音書であるとエックハルトは語っているが、その福音書の渾身の解釈が本書である。ギリシア教父以来の人間神化（テオーシス）思想の伝統に立ち、「魂のうちにおける神（の子）の誕生」を語る「父は自分の子として、その同じ子としてわたしを生んだ」という彼の言葉は他の27の言説と共にヨハネス22世によって異端断罪されるにいたる。エックハルトのこの中心的教説の神学的論理構造解析の鍵が本書『ヨハネ福音書註解』のなかにあるのである。それは「義」と「義人（義なる者）」の間の独自なアナロギア論および範型論の枠組みであると評者は考えている。エックハルト研究者として永年の研鑽を積んだ訳者の信頼できる訳業は専門の研究者のみならず多くの読者にエックハルトという思索の巨人への入り口を提供するものとなるであろう。

田島照久（早稲田大学文学学術院教授）

世界思想社
3,000円＋税

京都の「まち」の社会学

鯵坂　学（大学社会学部教授）、小松秀雄編

京都に関する書は、観光やエッセイなどの一般書に数多く見られるが、専門書となると、そのほとんどが歴史や文化史、宗教、景観や建築という領域に限られており、本書のような社会学の視点から総合的に京都を論じた作品は、これまでに見当たらなかった。それは、研究対象として京都を捉えるにはあまりにも広くかつ深すぎて、なかなか手をつけにくいという事情があったように思われる。本書は、そのような壁を突破する手がかりを与えてくれるという点で、まず興味深い。

「京都の地域社会と文化に関する社会学的な総合研究」として位置づけられる本書は、その言葉通り、伝統産業、「まち」の変遷、地域コミュニティとアソシエーション、祇園祭、景観、町家、花街、観光、老舗、職人、京都のイメージ、というあらゆる角度から分析されているが、その根底には地域社会への視点が貫かれている。それは、京都に暮らす人々のごく日常的な生活への視点である。歴史都市として、伝統産業都市として、観光都市として君臨する京都の内実は、長い年月のなかで培われてきた職住一体型の近隣住民相互の知恵と自治意識に根ざすものでもある。それが時代の移り変わりのなかで、そして伝統と革新のはざまで揺らぎ、絶えず葛藤と再生を繰り返しながら、京都という「まち」の輪郭を維持してきた。日本の文化を預かりそれを生かしていく場としての京都の社会学的研究が、今後も発展していくことを期したい。

中西典子（愛媛大学教育学部准教授）

明石書店
6,000円＋税

朝鮮近代の歴史民俗誌
慶北尚州の植民地経験

板垣竜太（大学社会学部准教授）著

著者の板垣竜太氏は東京大学大学院で文化人類学を専攻した文化人類学者かつ朝鮮近現代社会史研究者である。と同時に、近代朝鮮のみならず現代朝鮮半島と日本との関係についてもアカデミックな立場から絶えず発言する気鋭の研究者でもある。よって実地のフィールドワークのみならず文献資料調査のいずれにも秀でており、かつ現代社会にも強い関心を持っており、本書ではその強みが遺憾なく発揮されている。

さて、本書は、植民地期の朝鮮社会を慶尚北道尚州という地域から政治・経済・教育の面からとらえ返し、農村の日常生活のなかに日本の植民地支配の及ぼした影響と人々の動きをダイナミックに描いたものである。上（中央）からの権力作用と下（地域）での多様な対応の問題、前近代から近代に至る時代の推移などマクロな視点に、地域エリートの動向、農村青年の日記の分析などミクロな視点も織り交ぜながら、朝鮮における「植民地近代」経験を具体的、構造的に描き出している。

著者は、この尚州という地域に数年間居住し、資料調査や聞き取りなどを積極的におこなっている。かといって、本書は地域社会の紹介に決して埋没することなく、地域から全体を見渡す議論を構築しており、非常に読み応えがある。とくに「世界史は細部に宿る」という氏のことばに評者も歴史家としてただうなずくばかりである。一読をお薦めしたい。

三ツ井　崇（大学言語文化教育研究センター講師）

ミネルヴァ書房
2,800円＋税

世界政治叢書第8巻
中国・台湾

浅野　亮（大学法学部教授）、
天児　慧編著

本書は、現代の中国・台湾の内政・対外関係に焦点を当てた国際政治の教科書であり、現代の中国および台湾の状況を多角的に描き出す意欲的な内容になっている。

天児慧は、中国が改革・開放以来経てきた劇的な変化とそれでもなお変わらない基底構造の双方を強調し、「絶対に変わらない」という思いこみや、逆に「もう変わったのだ」とする楽観主義を戒めている。浅野亮は、中国共産党、国務院、中国人民解放軍という三つの主要アクターによる対外政策決定システム（党政軍モデル）が基本的に維持されつつも、鄧小平の退場後に集団指導が定着しつつあり、企業、地方、世論をも含めた多元的・拡散的な決定システムになりつつあることを指摘している。つまり本書は現代中国の変化と不変の構造に焦点を当て、中国政治が一筋縄では理解できないことを示してくれている。

本書はさらに、台湾内政や米中台関係に射程を伸ばしている。台湾をめぐる二つの章では、台湾がすでに100年以上も中国大陸と離れ、中国の圧力の下で異なるアイデンティティを育み、民主的な別個の国家としての体裁をほとんど持ち合わせていることや、台湾の存在が米中関係の最大の問題となっていることが正確に分析されている。

本書の文章は平易であり、執筆陣も充実していて、中国・台湾や東アジアの国際政治に関心を持つ学生、院生、社会人にとって格好の教科書が誕生したということができよう。

松田康博（東京大学東洋文化研究所准教授）

法政大学出版局
3,500円＋税

分別される生命
20世紀社会の医療戦略

川越　修（大学経済学部教授）、
鈴木晃仁編著

本書は、前号で紹介した『生命というリスク―20世紀社会の再生産戦略』の姉妹書で、九つの論稿から成り立っている。

本書の前半では、病気という生命のリスクを回避するために、20世紀社会は医療の病院化と科学化を推し進めてきたが、病院化のプロセスでは、例えば病床や看護婦に地域固有の意味付与がなされること、また治療や処遇のあり方は直線的に科学化されるのではなく、伝統的な対応の余地を残しながら多元的に、かつ地域や階層によって異なった形で進行することなどが明らかにされる。

後半では、医療の制度化の結果、疾病構造が急性の感染症から「生活習慣病」へと質的な変化を遂げるとともに、長寿化にともなって新たな病気が見出される様子も論じられる。いわく過渡期の「更年期障害」、不可逆の「認知障害」。「更年期障害」の克服は不断の主体化を促すが、「認知障害」の認定は主体としての資格剥奪を意味する。相反する働きかけによって精神・神経疾患周辺の「障害」が病気の仲間入りを果たし、21世紀の新たなリスク要因を構成することになる。

本書を読んで感じるのは、20世紀社会の贈り物である長い生涯を受け容れることの難しさである。今日では、死が老いと、老いが病と結びつく。老病死がこれほど一体化して現れることはなかった。ヒトの生き方についても考えさせられる比較社会史の共同作業である。

中川　清（大学政策学部教授）

東洋経済新報社
1,800円＋税

女女格差

橘木俊詔（大学経済学部教授）著

何はともあれ、ネーミングの勝利、である。今を生きる女性には、実に複雑な響きを持つタイトルではないか。格差といえば、おおむね「勝ち」「負け」のレッテルが貼られるものだが、こと女女格差に関しては、そう単純な話ではない。夫や子供に恵まれて温かい家庭を築いていたとしても、高い社会的地位や所得を手に入れていたとしても、仮にその両方を得ていてさえも、すんなり「勝ち」を満喫できないことがままある。そんな悩ましい「気分」に言葉を与えて、なるほどそうかと自覚させた最たるものが、多分『負け犬の遠吠え』なのだろう。

もとより、本書は「気分」を論じているものではない。「気分」の根底にある女女格差の本質と実態、それが生じるメカニズムを、主に公表データを用いて丹念に、かつ極めて平明に論じている。膨大な表の出所の大半は、誰もがアクセスできるものであるだけに、データの取捨選択や見せ方における著者の技量には、改めて感嘆させられた。

女性の方が選択肢が多い柔軟な人生を送れる（だからややこしいんじゃない）。うまく行けば満足度も男性より高い人生なのではないか（うまく行けばね）。著者の問いかけに、苦笑しながらそうつぶやきつつ、選択したというよりは、所与の要因もいまだ大きいそれぞれの人生を丸ごと引き受けて、たくましく歩み続ける女性の姿が本書の背後には確かに息づいている。それだけに、そのめげそうになる響きとは裏腹に、女女格差は決してお先真っ暗な事態でもないと思うのである。

浦坂純子（大学社会学部准教授）

同文舘出版
3,300円＋税

ランドマーク商品の研究③
商品史からのメッセージ

石川健次郎（大学商学部教授）編著

生活の前提を大きく変えた商品を「ランドマーク商品」と定義付け、商品の力や受け入れられた社会状況について多角的に分析したシリーズの第3弾である。今回も小包輸送を変えた宅配便、対面販売が普通だった買い物を便利にした自動販売機など、今では当たり前のように定着した商品が取り上げられている。同シリーズを読み面白く思うのが、消費者をとらえる魅力的な商品が出てくることについて経営者の発想などをただ礼賛するのではなく、便利さゆえに失っているものに着目していることだ。同書で取り上げられた「ファミコン」は80年代、社会の成熟化による娯楽の時代にマッチし、多くの子供たちが熱中した。私もその1人で、思い出と重なっているが、同機によって子供の頃にすべき本を読む時間は確実に失われ、今は少し後悔まである。このように今当たり前に使っている商品により、どんな能力を得て失っているかに思いを巡らせると、生き方が変わるかもしれない。商品の魅力によって吸い取られる人間性を考えさせる好著だ。

今、新聞業界に身を置く中で、「インターネット」がランドマーク商品だと実感している。ネットは自分の欲しい情報を簡単に取り出せ、情報はタダの意識を加速させている。だが、その裏で大切な何かが失われているとしたら。活字が息を吹き返すヒントはそこにあるのかもしれない。ただ、「ランドマーク商品」で失うモノがあっても、確実に生活には根付いてしまうのだが。

神山純一（朝日新聞社記者）

東京美術
1,600円＋税

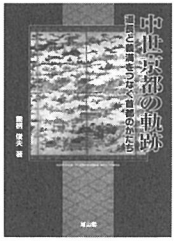
もっと知りたい曾我蕭白
―生涯と作品―

狩野博幸（大学文化情報学部教授）著

展覧会で作品に感興をもよおすことはあっても、押しつけがましい説明文に辟易することすらある。1984年、狩野さんは『近世日本の美術―京都画派の活躍―』（京都国立博物館）をてがけ、曾我蕭白「美人図（狂女図）」（本書収載）を陳列して、「この美女の発散する妖気はただごとではない」と、わずかこれだけでこの絵の放つ妖しい気配を「表現」してみせた。作品と鑑賞者との間に鋭い警戒心と快い緊張感をもたらしたこのフレーズは、観る者のすべてに雷がつらぬくほどの途方もない衝撃を与えたにちがいない。永い美術展の歴史にあって、その解説の「ありよう」は事件というより、むしろ革命といってよい。

とはいうが、作品にひそむ古典や諧謔、風刺、あるいは画家の検証、さらには時代の深層を摘まみ出す力量がなければ、とても至らない。はたして本書でも、すべての作品を短いフレーズに凝縮し、いよいよ「蕭白の精神のありか」に迫る。それは見事というほかない。それだけではない、蕭白を通して元禄期と文化・文政期のはざ間に、まるで没したように見られる18世紀という時代の文化的強靭さ、奥行きの深さに筆がおよぶ。読むほどに絵解きのあざやかさに引き込まれ、やがて愉悦に襲われるのは、あげて著者の「触れることば」の表現にある。

高橋隆博（関西大学文学部教授）



雄山閣
2,800円＋税

中世京都の軌跡
―道長と義満をつなぐ首都のかたち

鋤柄俊夫（大学文化情報学部准教授）著

「上杉本洛中洛外図屏風」という中世京都を描いた史料がある。著者はそこに描かれた『都市の王』『富裕層と公武勢力』『寺社群』『下界』の上京の姿を「各地の戦国大名が『洛中洛外図』に求めた情報は、自らの権威と権力を体現する館そのものであるのと同時に、理想とされる『首都』全体の条件であり、一方で公方が、『洛中洛外図』によって主張し発信しようとした情報は、自らの理想とする『首都』全体の条件だったのでは」と述べる。

京都の地が政治の中心となるのは平安京遷都による。平安京は現在の千本丸太町付近が中心であり「洛中洛外図」の姿と異なっていた。京都は古代から中世を通じて平安京から中世京都へ変化してきた。著者はその中心に院政期に鳥羽殿と白河上皇・鳥羽上皇、鎌倉期に持明院殿と西園寺公経、室町期に室町殿と室町将軍を置き、「遺跡」と「場所へのこだわり」という二つの視点と「分裂」・「再生」・「主張」という三つのキーワードから説明をしている。

その手法の中心は発掘調査で明らかにされた遺跡情報である。鳥羽殿では遺跡情報と文献史料から2人の上皇での都市構造の違いと上皇を支えた勢力を明らかにし、持明院殿や室町殿では著者が行った校地内の調査成果を基に変化が明らかにされている。

新町・室町キャンパスには調査で出土した遺構・遺物が公開されている。本書を片手に舞台となった地を訪れ、著者の「場所へのこだわり」の意味を感じていただけたらと思う。

市澤泰峰（名古屋市教育委員会見晴台考古資料館学芸員）

新教出版社
2,800円＋税

アメリカンボードと同志社
1875―1900

ポール・F・ボラー著、北垣宗治（大学名誉教授）訳

著者は米国の南メソジスト大学、マサチューセッツ大学、テキサス・キリスト教大学で教鞭をとっておられた著名な歴史学者である。イェール大学在学中に太平洋戦争になり、アメリカ海軍で日本語を学び、戦後占領軍の一員として来日、日本史や日本思想に関心をいだくようになり、帰国後ラトレット教授の指導を受け、1947年イェール大学に提出された博士論文が原著である。

同志社創立と初期の歴史は、不思議な出会いや葛藤に充ち満ちているが、著者は新島襄の誕生から永眠後10年までの出来事をアメリカン・ボード関係の英文資料を存分に駆使して詳細に論じている。同志社創立と初期の歴史がアメリカン・ボードの日本宣教に負うところ大であり、それに関連して様々な葛藤があったことはよく知られているが、アメリカン・ボードと同志社との関係を19世紀アメリカのプロテスタンティズムと日本の歴史・文化との折衝という大きな枠組みの中で、ダイナミックな歴史考察を行っているところに本書の特色がある。

本書は博士論文とはいえ、じつに物語性に富んでおり、当時の緊張した状況を見事に再現している。それに加え、新島研究第一人者である北垣宗治大学名誉教授の流麗な翻訳と訳注が本書の価値を高めている。

新島襄をはじめ後継者たちのアメリカン・ボード関係者との出会いが、ほかならぬミステリアス・ハンドの導きによるものであったことを改めて教えられる書である。

野本真也（大学名誉教授）

笠間書院
3,500円＋税

「垣間見」る源氏物語
紫式部の手法を解析する

吉海直人（女子大学学芸学部教授）著

垣間見（かいまみ）―「垣などの透き間から、こっそりのぞき見をすること」（角川古語大辞典）とある。王朝文学においてはこの垣間見こそが男女の恋物語の契機であり、出会いの常套手段として理解されてきた。このような従来の概念を吉海氏は「あらまほしき幻想」であると言い、源氏物語における「垣間見」という手法の徹底分析・再検討の必要性を唱える。

本書ではまず第1章で従来の垣間見論への異議申し立てがなされる。「垣間」から「見」るという固定観念の撤廃、垣間見の視線の複数ベクトルの明示、聴覚と嗅覚、照明の仕掛けといった多方向からの「垣間見」の総合分析は見事である。第2章では源氏物語以前の物語に「垣間見」の始原を探求し、第3章では源氏物語に影響を与えた伊勢物語の垣間見パターンの分類を試みる。第4章から第8章は源氏物語正編の垣間見を取り上げ、空蟬・軒端の荻を見る源氏側のフィルターの指摘（第4章）、夕顔と源氏相互の覗き合いと聴覚の重要性（第5章）、幼い紫の上を通した藤壺幻視（第6章）、レポーター役としての夕霧（第7章）、女三の宮を同時に垣間見た夕霧と柏木の印象の差異（第8章）についてそれぞれ斬新な視点から論じている。第9章・第10章は宇治十帖の垣間見であり、垣間見時の薫の芳香の意味とそれに対照する匂宮の垣間見を考える。第11章及び第12章は氏の「勘と経験によって選び取った垣間見のキーワード」として「あらは」「かうばし」が選ばれ、新たな垣間見論が展開される。

ぜひとも本書の独自の目線に同調して『源氏物語』の世界を「垣間見」てほしい。

飯塚ひろみ（女子大学文学研究科博士課程）

世界思想社
2,300円＋税

源氏物語の乳母学
乳母がいる風景を読む

吉海直人（女子大学学芸学部教授）著

「現代の親子関係は平安朝には通用しない」—吉海氏は常々そう語っている。なぜなら、平安貴族社会において母親はみずから授乳することなく、生まれた子の養育に携わらないから。その母親に代わって子を養育するのが「乳母」（めのと）なのである。従来端役として片付けられてきた「乳母」に光を当てその重要性を唱え続けてき吉海氏は、ここに「乳母学」を提唱する。

本書は副題に「乳母のいる風景を読む」とある。ところが、『源氏物語』には「乳母」の「乳母」たる役目、すなわち母に代わって乳を与えるシーンは描かれない。だが吉海氏は「乳母は、授乳という本来の職務からは完全に切り離されており、養君のほうも既に成人している場合が多い。それにもかかわらず、乳母が乳母という名前のまま、物語のいたるところに存在している」ことを重視し、物語内での乳母の暗躍を見逃さない。当時の読者にとって乳母は当たり前に存在するものゆえ、わざわざ物語に描かれないことが多い。本書は、乳母の描かれない場面にも当たり前に乳母が存在し、物語展開に大きく関与していることを説き、乳母のいない風景にこそ乳母を視ることの必要性を現代の読者に教唆する1冊である。以下に目次を記しておく。

乳母への視座—序に代えて—
第1章　『源氏物語』の乳母達
第2章　夕顔巻の乳母達
第3章　惟光の一生
第4章　右近の活躍
第5章　少納言の乳母
第6章　末摘花の乳母達
第7章　明石姫君の乳母
第8章　雲居の雁の大輔の乳母
第9章　女三の宮の乳母達
第10章　弁の尼
第11章　浮舟の乳母達
あとがき

飯塚ひろみ（女子大学文学研究科博士課程）

世界思想社
1,500円＋税

テレビのゆくえ

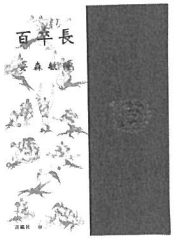
影山貴彦（女子大学学芸学部准教授）著

筆者はテレビが好きでたまらないようである（ラジオのことはもっと好きかも知れない）。ひと昔前、一家団欒と言えば、お茶の間にテレビは必需品であった。よくも悪くも話題の中心にテレビがあり、テレビがついているとほっとする、という家庭も少なくなかったはずだ（我が家などはその典型であった）。そのテレビが今、ピンチを迎えている。

「あと2年ほどで、今お使いのテレビが見られなくなるかも知れません。」いわゆる放送のデジタル化の広報である。しかし筆者が心配するのは、外側（受像機）のことではなくて、中身のことだ。このままではデジタル化云々の話とは関係なく、テレビがお茶の間から消えてしまいかねない。そんな危機感を持って、筆者は言う。「テレビはまだまだみんなを元気づけられるはずだ」と。そのために筆者は大いなる提言をする。「一度テレビを休んでみませんか？」

テレビの大衆性が故に、テレビは一度に大勢の人を相手に奮闘してきた。テレビの作り手は、できるだけ多くの視聴者の要望に応えよう、少しでも多くの人に見てもらえるようにと、それこそ涙ぐましいほどの努力をしている。少々疲れすぎたテレビを今一度、オーバーホールしてやり、テレビについてみんながじっくりと考えることがテレビにとって必要なことではないか？筆者は、テレビを愛する人たちに優しく、愛しく語りかけ、そして時に厳しくエールを送っている。

河瀬教義（株式会社スペースビジョンネットワーク　CS放送　GAORA）



青磁社
3,000円＋税

歌集　百卒長

安森敏隆（女子大学学芸学部特別任用教授）著

安森氏の第三歌集である。書名は、イエスに舌を巻かせるほどの信仰を告白したローマ兵の隊長「百卒長」（「マタイ伝」5章8節）に由来しているが、安森氏が尊敬してやまない歌人塚本邦雄（1920—2005）から、「安森君は『百卒長』だねー！と言われたのが、この歌集の題名」だという。安森氏は敬虔なクリスチャンで、歌集の装丁は神戸女学院チャプレンのご子息智司氏の手による美しいものである。

歌集は340首、3部構成でできており、第Ⅰ部「俊成の坂」（108首）、第Ⅱ部「百卒長」（129首）、第Ⅲ部「母の命」（103首）である。Ⅰ部、「産土の声」、Ⅱ部「魂の声」、Ⅲ部「命の声」を収めていると安森氏が言うとおり、さまざまな声が聞こえるのだが、全体のテーマを回帰として読み取れるように思う。Ⅰ部は、安森氏の家は伏見の藤原定家の父、俊成の墓の近くにあるが、ここを起点に氏は、日本各地を旅して詠い、最後に伏見に戻り城南宮曲水の歌で、平安の世界に想いを馳せる回帰である。Ⅱ部は苦悩の地球、世相への温かい視点と百卒長の信仰を織り込み平和、安らぎへの希求、回復であり、Ⅲ部は8年の介護をした母を詠う。安森氏の誕生は1月6日、同日に逝かれた実母と自然の命の芽吹き、イエスの誕生と己の誕生重複などを詠う命への回帰である。

1頁に2首組のこの歌集は、歌壇史に介護短歌のジャンルを創始した安森氏のスケールの大きな、温かい歌集である。

杉野　徹（女子大学学芸学部特別任用教授）

おうふう
12,000円＋税

古代宮廷儀礼と歌謡

藤原享和（高校教諭）著

藤原享和氏の著書『古代宮廷儀礼と歌謡』が刊行された。内容は「『古事記』所載の儀礼と歌謡」と「恭仁宮と大歌所の儀礼と歌謡」の二つに分かれる。第1編では、国見儀礼、献酒儀礼、葬送儀礼に関わる歌謡を採り上げており、書名が示す通り儀礼の場とともに記される歌謡を、古事記の表現に依拠して意図するところを論じることに重きが置かれる。第2編では大歌所の儀礼に焦点を当て、歌謡の表現の問題をはじめとして、歌謡の成立時期の問題や儀礼そのものの実体を明らかにすることを目的とする。具体的な手法としては、歌謡の表現と同一もしくは類似の語を整理分類し、歌謡、儀式書、歴史資料などから根拠となる用例を挙げて論を展開している。的確な用例に裏打ちされた緻密な研究方法を用いて、儀礼の問題を正面から捉え、歌謡研究を推進したことの意義は大きい。

最も紙面を費やして書かれた、第1編の「葬送儀礼歌」について見ていく。日本の葬礼の変遷、大御葬歌の研究史の整理を経て、第3章では大御葬歌の場を殯宮と捉える従来の説を批判し、葬送もしくは埋葬の段階での歌と位置づける。続いて「ところづら」の語の解釈を行い、第5章では歌謡が大御葬に歌われることの必然性を解き明かすという、一連のテーマに沿った論考となっている。いずれも従来の説を覆す独創的な意見に満ちており、今後の大御葬歌の研究の指針となる内容であることは疑いない。氏のこれまでの研究の集大成というに相応しい好論で構成されており、氏の研究水準の高さを示す内容となっている。

内藤英人（大阪桐蔭高等学校教諭）

北斗書房
800円＋税

体育教員をめざす学生のために
―高田典衛先生から学んで

伊藤博子（高校教諭）著

「大学時代の講義をその後の仕事や生活の支えとしていくこと」は、大学関係者にとってはうれしい話ではあるが、現実にはめったにあることではないとも思われる。そのめったにあることではないことを、伊藤博子先生は30年以上にわたる教員生活で実践しているのである。伊藤先生は、昭和30年代～50年代にかけて、「小学校体育のカリスマ的存在」であった高田典衛先生の講義内容に強い影響を受け、高田先生の話やその講義ノート、さらには数多い著書などから体育教師としての考え方や授業の進め方を学び、日々の授業実践に生かしてきたのである。特に、本著の「第1章・高田典衛講義録」は、こどもの発育発達を理論的に踏まえた体育授業の基本的な考え方を講義されたものであり、資料としての価値もさることながら、その内容は圧巻である。当時、伊藤先生の2年先輩であった私も講義の記憶がはっきりとよみがえってくる思いである。

また、本著は高田先生の教えを元にしながらも、「第4章の後半」からは、伊藤先生独自の実践やクラブ顧問を含めた幅広い体育教師の仕事への取り組み方にも積極的な提言が見られている。

これから小学校教師や中学・高校の保健体育教師を目指す学生はもちろんのこと、体育・スポーツの分野で仕事をされている多くの方々にも、高田典衛先生の「体育への深い思い」を感じてもらうために、また保健体育教師としての仕事への取り組み方を知るためにも、是非とも読んでもらいたい1冊である。

池田延行（国士舘大学体育学部教授）

平凡社
760円＋税

日本は中国でどう教えられているのか

西村克仁（香里中学校・高校教諭）著

面白いタイトルである。各国の教科書のみをとりあげて、その内容が現地で教えられているとする外国教育理解が一般的であるが、本書では、著者が2006年に1年間現地の大学に留学し、中・高校に赴き、教室の生徒たちの生の声が拾われている。

中国の若者が、高校や大学受験のために歴史教科書の内容を暗記しなくてはならない事情や、一方で、「生活感覚」として日本のアニメ、マンガ、ファッションなどサブカルチャーに親しみ、あこがれさえもっているギャップが明らかにされている。本書の意義はこの現場性にあるといえる。

本書は、中国の学校の特徴（第1章）、愛国主義教育と歴史教育（第2章）、歴史の授業はどのようなものか（第3章）。中国の中高生と歴史問題（第4章）の4章からなり、中国における日本認識の一端を歴史教科書の内容紹介と学校現場での授業から明らかにしている。

一般的に、公立学校で行われる歴史教育は、程度の差はあれ、ナショナリズムと当該国家の支配の正当性を意義づけようとするものである。多民族国家としての中華民族の優位性を注入的に教えていく中国と、日本国民であることを個人的な資質として自覚させる日本とでは、個人の知識や判断、態度化の自由度が異なっている。本書には、中国の若者にみられる個人の自由度が、日本のサブカルチャーへの志向から垣間見えるのも興味深い。なお、中国では最近「品徳と社会」（初等教育）など個人と社会のあり方を考えさせる社会系の新教科が登場したことを付記しておきたい。

藤原孝章（女子大学現代社会学部教授）